農学国際教育協力研究センター（ICCAE）からの問題提起

― ICCAEの役割とオープンフォーラムでの討論の方向について―

農学国際教育協力研究センター
松本　哲男

ただいまから、農学国際教育協力研究センター（ICCAE）が目指すものと、今日、明日の討議についてお話したいと思っております。私達のICCAEが今後目指す具体的な目標をビジョンという形で提案させていただきたいと思います。ICCAEは、昨年４月にオープンいたしました。そしてセンター名にInternational Cooperation Center for Agricultural Education ということでInternationalという文字が入っております。しかし、このセンターが本当にインターナショナルなセンターになるかどうかというのは、私たちの努力だけでなくて、ここに出席されておられる大学・研究機関の方々が私どもをどのように使ってくださるかというところにかかっています。ICCAEとしましては、そうした期待に応えうるだけの能力を短時間の間に身につけたい、と考えております。このオープンフォーラム開催予定を立てた時、最初に懸念したことは私どもが招待状を出しても、大学あるいは研究機関が、「一体、何だ」、「我々はすでに国際協力の研究をやっている。おまえ達のような組織はいらない」と言われて返事が返ってこないのではないかということでした。ICCAEは、インターナショナルというよりも、まだローカルというのが実態ですが、本日このように皆様に出席していただいたことで、ローカルからナショナルへの第一歩を踏み出し、まず第１の関門を何とか突破できたのではないかと考えております。今日、明日の討論の中で、私どものセンターのあるべき姿、あるいは皆様に使っていただける方法、そのあたりを討論して頂いて、私どもに課題を投げかけていただければ幸いかと思います。ICCAEは、少なくとも設立３年後、2002年の３月までにはナショナルセンターとしてネットワークの形成を通して、発展途上国が直面している農学分野の問題を解決できる人づくり協力の窓口を果たせるようになりたいと考えています。そして2004年までには、海外からの情報問い合わせが、これまでつながりのある大学とともに、当然このセンターにもくる。そしてICCAEがその情報に関して、必要ならそれ以外の大学への窓口になる、インターナショナルセンターとしての機能を果たすようになることを目標にしております。

ICCAEは二つの研究領域で構成されております。ひとつは、プロジェクト開発研究領域；この領域は第１に、人づくりのための領域プロジェクトの発掘、開発と提言を行います。そのための調査はもちろんここに入っています。第２に、JICAプロジェクトの分析・評価、人材派遣等を考えております。この中にはNGOの活動についての分析評価も入ってきます。そして第３には、海外からこられる研究員・研修生の研修の企画と実施です。もうひとつは、協力ネットワーク開発研究領域;この領域は第１に、データベースの活用とコーディネート手法の開発。第２にプロジェクトマネージメント手法の開発。第３にコンソーシアムとネットワークの形成。第４に、国内から海外へ派遣される派遣専門家の派遣前の研修企画と実施を行います。

特別講演のあと、今日から明日にかけて、３つのテーマについて、討論する予定でいます。討論の１は「途上国の協力ニーズをどう把握するか」です。皆様の報告の要約を、事前に送っていただくことをお願いいたしましたところ、ご多忙の中、快くお引き受け下さいまして有難うございました。資料として皆様のお手元にございますが、皆様の経験は、私どもに非常に大切なことを教えてくれております。例えば、農工大は発展途上国の教育協力を進めるには双方、いわゆる発展途上国側も、そして我々の方も、双方にとって何がニーズなのか、これを把握する必要がある、ということを述べておられます。また派遣専門家のプロジェクトの目的に対する意識の重要性です。研究者にとって発展途上国に行く、あるいは国際協力を行うというのは、自分の研究に役立たない、これをやれば時間を取られてしまって学会から自分が離れていくことになる

のではないかというような不安があります。一方では発展途上国の教育問題がとても大事だという認識もあります。こういう内部での戦いがあるのですが、教育改革・改善と研究を一致させていくことの重要性が指摘されています。また、岩手大学からは人づくりのフォローアップが必要である。ひとつのプロジェクトが終わって、皆が引き上げてしまったら、予算が無くなってそれで終わりになっている。そういうようなことも多々あるとのことです。そのためにはニーズを把握するだけではなくて、その後のフォローアップも大事であるということが述べられております。また本日参加されているJICAは、最近地域別グループに組織を改変しました。その理由については私どもが今後この分野の国際協力を推進していく上で大変参考になるのではないかと考えております。このように、皆さんの豊かな経験を今日、明日報告していただき、また討論を通じて、真のニーズ把握の方法を確立することを目指したいと考えております。

討論の２としまして、「協力活動の意志を持つ人材をどう活用するのか」、という問題がございます。第１に、各大学における窓口の形成ですが、すでにいくつかの大学では国際交流委員会とか、支援委員会あるいは、学内ワーキング・グループというような名前で組織が作られていますが、まだこのような組織のない大学には、人づくり協力の窓口を作っていただきたい。作って頂けるかどうかというのが、私どもの今後の活動を広げていく上でのひとつのポイントになっていくのではないかと思います。ICCAEは各大学の窓口と連絡を取ると共に、対外的には全国の大学の窓口を目指したい。海外の機関が日本の大学へどういうふうに連絡をとってよいのかわからないという時には、ICCAEの名前が出てくるように、私どもは成長したいと考えております。

第２に、個人の経験を組織に蓄積するということが大事ではないかと思います。各大学のこれまでのいろいろなプロジェクトの進展というのは、一番初めに非常に先駆的な先生が個人的に作られた、10年、20年という非常に長い個人的な蓄積の上に交流が始まったと伺っております。こういうものを、単に個人の経験にとどめず、各大学の組織に蓄積する。そして、それを相互に交流して活用する。そのようなことが必要ではないかと思います。

第３に、拠点校、コンソーシアム方式というのが京都大学、九州大学、岡山大学で行われています。これらの拠点大学の方式につきましては、今後ますます伸ばしてしていただきたい。そしてICCAEは、その皆様の伸ばされた組織をぜひ活用させていただきたいと考えております。そのことについてもご意見を出していただきたいと考えております。拠点大学方式でコンソーシアムが形成されて行われている中身というのは、主に協力研究というところになってくると思います。ICCAEもコンソーシアム形成を図っております。国内外の大学・研究機関を含め、今形成しつつあるところです。私どもも研究を行いますが、私どもの研究は、大学あるいは拠点大学が行っているところの協力研究とは若干違いまして、開発を研究する。どのような形の開発がいいのか、あるいは、新しい学問形成というようなもの、この分野での定番というのでしょうか、そのようなものを作っていきたい。例えば、開発途上国での真のニーズを掴むにはこの方法で行えば掴みやすい、そのような方法のマニュアル化や開発研究が我々のテーマではないかと思います。私どもは、文部省と緊密な連絡をとり、また各大学と緊密な連絡をとり、JICA，農水省の協力を得ましてICCAEの任務を遂行していきたいと考えております。

第４の人材データの活用ですが、現在ICCAEは約1400の方々の登録リストを持っております。その中身ですが、皆様のお手元の要旨集８ページを開いていただきますと、私どものデータの一部が示されております。できれば、明日昼食の時間に、前川から皆様に中身をお見せしたいと考えております。このデータに関して、私どもが事前に各大学をお伺いした時に、岡山大学から、当センターとリンクすることがあるならば、次回同じ様式での人材登録を行いたいというような申し出がありました。ICCAEとしては、アンケート用紙・データベースの見本を、明日お帰りの際、持ち帰っていただきたいと考えております。もし、この会議で合意ができるならば、将来のデータベース・バージョンは、ICCAEの今のバージョンを１とすれば、バー

ジョン２の共通項の部分を主要大学で担当者を選んでいただいて協議したい。もちろん各グループ、拠点大学にはそれぞれの意向があると思いますので、その部分を全部同じにすることは難しいと思いますが、少なくとも共通項については、これだけのものは同じ物を作ろうではないか、というような話し合いができれば、と考えております。

第５に情報の道筋の形成についてですが、ICCAEからの情報提供の方法についても皆様で検討していただきたいのですが、一つの案としましては、「ツリー方式」というような形で、各大学の窓口の中にキー･パーソンを決めていただいて、ICCAEとその方との双方が情報をやり取りし、そしてキー・パーソンから情報を学内に配っていただくというような形を取れるのかどうかを検討していただければと思います。また各大学からの直接の質問、要望に対しては、それを仲介するようなことをさせていただきたいと考えております。

次に第６の人材の活用ですが、人を出しやすい仕組みをどう作るかというのが焦点になるのではないかと思います。既存の研究者の活用という点につきましては、岡山大学から教官OBを対象とした全国代替講義派遣機構の提案がありました。これはなかなか良い提案だと思います。現在発展途上国とか、あるいはJICAからは定年間際の先生に来ていただくのはどうかというような声がちらりと入ってきてはいますが、逆に、そういう先生は国内で若手の研究者が海外に出られた後のその部屋の講義を受け持つ、或いは学生、院生の指導を短期間受け持つようなことが可能かどうか、そのような内容の提案だと思います。他にそのようなアイデアがございましたら、今回の討論の中にどしどし出していただき、ICCAEと一緒に文部省の方に提案をしていきたいと考えております。また、長期派遣をどう確保するかというのも非常に大きな問題で、今の代替案というのもそのひとつの回答にはなると思いますが、各大学、JIRCASが若手研究者をどう確保して長期派遣をしているのか、是非報告していただきたいと思います。ポスドク、院生の派遣の可能性につきましては、九大や京大が院生を海外に送って研究活動を行っています。その方法について、是非この場で学びたいと思います。実は、縄田先生の教え子だと思いますが、ラオスで院生２人が研究されていて彼らとお話をさせていただきましたが、先生の送られてきたデータの中にはその２人が入っておりませんので、どういうことになっているのかなと思いましたけれども、現地でがんばっておられます。学生を送るシステムというのは岡山大学のほうでも是非伺いたいというような話が出ておりました。JIRCASの前野所長さんは、現地で仕事をする意志を持っているポスドクやあるいは院生がいるならば、その人たちに全体の開発計画テーマの中から一部を担ってもらい、その仕事で学位が取れるような仕組みがあれば、JIRCASにいつでも受け入れるというようなことを、これはまだ個人的な見解ですとしながらも言っておられます。私どもはこのアイデアに非常に励まされています。ポスドク、院生派遣に関しての可能性を、是非，京都大学、九州大学の知恵を拝借して高めて行きたいと思っております。

最後に後継者づくりですが、この分野の国際研究者の育成が強く望まれています。どうすれば実現できるか、これも討論していただきたいと思います。

最後のスライドになりますが、討論３としまして、「人づくり協力に関わる学問をどう築くか」。これにつきましては、農工大の方から個別分野の統合化、あるいは学際領域の組織化の問題が提案されております。また九州大学の方からは当事者だけでなく組織の業績として評価する方法がやはり尊重されなくてはいけないだろうと提言されています。ICCAEが実際にやる仕事というのはコーディネイター役ですので、これは非常にありがたいお言葉だと考えております。皆様、色々なアイデア、あるいは考えがおありかと思いますが、「私はこういう仮説を持っている」というような方がおみえでしたら、是非討論の中で出していただいて、忌憚のない討議を進めていただきたいと思います。以上で私の方から私どものセンターが目指すもの、今日明日の討論につきまして私どもの提案とさせていただきます。ありがとうございました。

ICCAEの目指すもの

平成12年3月16日
名古屋大学農学国際教育協力センター
松本　哲男

ICCAEのビジョン

ネットワークの形成を通じて、発展途上国が直面する農学分野の問題を解決する人づくり協力の

ナショナルセンターになる……2002年3月までに
インターナショナルセンターになる…2004年3月までに

プロジェクト開発研究領域

- 人づくりのためのプロジェクトの発掘、開発と提言
- JICA、大学プロジェクトの分析、評価、人材派遣
- 研修の企画、実施

協力ネットワーク開発研究領域

- データベースの活用とコーディネート手法の開発
- プロジェクト・マネージメント手法の開発
- コンソシアムとネットワーク形成
- 派遣専門家への研修の企画、実施

討論

1）途上国の協力ニーズをどう把握するのか？

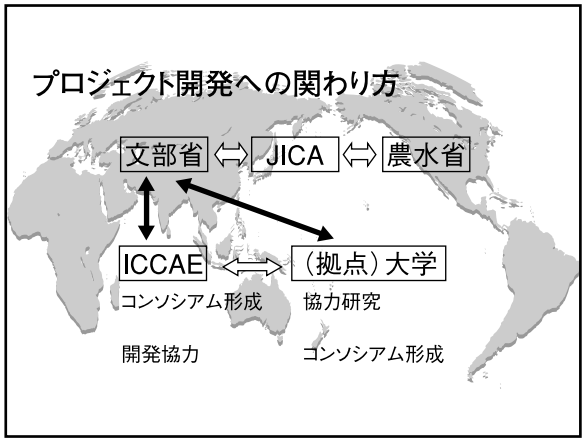
双方に必要
人づくりのフォローアップ
討論を通じて真のニーズの把握方法の確立をめざす

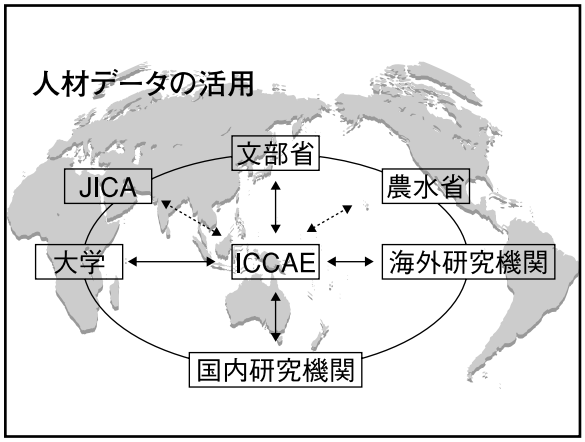
討論

2）協力活動の意志をもつ人材をどう活用するのか？

各大学での窓口の形成
個人の経験を組織に蓄積
拠点校ーコンソシアム方式の発展
人材データの活用
共通項の検討
情報の道筋の形成
人材活用

ICCAEの目指すもの





ICCAEの目指すもの